

Z 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっていました。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は1〜3となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきれずにきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
○	○	●	○	○	○

(3と解答する場合)

— 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

多くの選択行動において、われわれは、われわれ自身の意志により、しかも、自由¹⁾に選択を行なったと考えている。しかし、意志は実際に自由に選択を行なっているだろうか。また、そもそも、「意志の自由」とはどのような事実をいうのだろうか。

意志の自由は概して、決定論と対立させて論じられる。しかし、すべての決定論が意志の自由を放棄するわけではなく、むしろ逆に、この問題に関する多くの議論は二つの冷厳なる事実——第一に、われわれは自由意志をもっていると思²⁾つて有効に日常生活を行なっており、第二に、科学を中心とするわれわれの知識の予言能力を認めようとするならば、なんらかの意味で決定論をシンジ³⁾ョウとせざるをえないという二つの事実をいかにして両立させるかという点に、最大の動機があるように見られる。

もちろん、もつとも強い形の決定論、いわゆる「完全決定論」においては自由はない。しかし、この形の決定論は「決定」の仕方に対し、具体的意味がほとんど与えられていないゆえに、全く空虚な理論とみて差し支えない。ここで問題となりうる決定論は、「決定の仕方」に対し、なんらかの説明、理由づけを行なう意図があるものでなければならぬ。この種の有意義な決定論の標準的なものとして、「決定の仕方」を「先行状態が後行状態を決定する」とみなすもの、いわゆる⁴⁾「因果決定論」があり、これが科学的決定論を代表している。さらに、もし、この先行状態のすべて、すなわち、⁵⁾初期条件を完全に知ることが原理的に可能であり、かつ、先行状態と後行状態との関係がすべて微分方程式の形で表現され、これらすべての方程式は原理的に解けるとみなせば、古典力学的(ニュートンの)決定論の立場となり、また、初期条件の完全な把握を放棄し、かつ、先行状態と後行状態との間に、単に⁶⁾遷移確率を考慮するだけで十分である⁷⁾とみなせば、「確率的決定論」が成立する。量子力学の発展にもなつて、前者の形の決定論は、概して、後者と交替しつつある。

われわれの知識は全体として決定論的に編成されていなければならないという絶対的な理由は少しもない。し

かし、事実として、因果決定論はわれわれの知識のすべての分野に対して客観性の規準を供給する最大の源泉となつてゐる。つまり、われわれの知識は、たまたま、物理学を軸に大きく決定論の枠組みに編成されてしまつてゐるのである。われわれが決定論をとるのは、決定論が正しいからではなく、これが現実に知識の枠組みになつてゐるからである。

しかし、われわれが現実の世界の中において生活し、行動しようとするとき、とくに、一個の人間の行動を中心にして一つの事態を記述しようとするとき、全体としては決定論の枠組みを大きく前提としながらも、適宜に因果の連鎖を打ち切り、部分的に決定論をゆるめるような暫定的な認定と、それに応ずる言葉づかいとを導入することが必要となる場面が多くある。このとき決定論の中に自由が現われる。つまり、自由という概念は「自由が存在する」という形ではなく、「自由と認定する」という形で決定論の枠の中に現われるのである。このような形の、いわば、「弱い決定論」とも言うべきものは数多く考えられるが、その代表的なものが、「意志決定論」といわれ、また時に「柔らかな決定論」とゾクシヨウされるところのものである。

「柔らかな決定論」とは一般に、ある個体の行動を決定する要因が個体の内部にあるとみなされるとき、この行動を自由であると認定しようとするものである。しかし、ここに言う「要因が内部にある」という表現は、すでに多くの人が指摘するように、かなり曖昧な表現である。つまり、その内部原因そのものが、決定論の大きな枠組みからいへば、実は長い因果の連鎖の結果であり、最後には、その個体が有限の存在であるならば、結局はある外部原因につながると考えざるをえないからである。しかし、一般に、柔らかな決定論はすべてこのようなことを承知の上で、「内部原因」を認定しようとするものである。

このような認定を許す根拠は概してプラグマティックであるとみられる。つまり、なんらかの実用的目的のために因果の連鎖を人間内部で適当に打ち切ることが望ましい、または、打ち切らざるをえないとみなされるがゆえである。そのとき、それ相応の、因果の完結の規準を任意に設定すればよいわけである。こうした規準を絶対的なものとして確立しようという動機はいつの時代にもあつたが、そこで引証される根拠は常に時代の文化と相

対的にゆれ動いている。

しかし、たとえプラグマティックであれ、何ゆえにわれわれは因果を適当に打ち切る認定を、しかも、決定論の枠組みの中であえてせざるをえないのだろうか。

第一のもつとも強い理由はわれわれの生活を支える心理の中に自分の行動の因果を適宜打ち切りたがる傾向があること、つまり、自己の行動を自由と感ずる習慣があることである。つまり、われわれは人間が自由意志をもっていると思う心理的傾向があり、この傾向に沿うように制度、慣行を実際的に選択し、ひいては、その哲学的基礎づけまでも行ないたがるという、ごく自然な傾向をもっているということであろうか。

もちろん、この心理的傾向そのものがある程度、実際の社会的慣行や制度、あるいは科学的知識の発展状況などからフィード・バック的な効果を受けていることは当然考えられることである。したがって、今後、科学の発展が急速に進み、それに応ずる社会開発が制度、慣行に大きな変革をせまることになれば、自由意志によると主観的に認定される行動の範囲は平均的に狭められることになるかもしれない。

内因の連鎖の打ち切りが自然な心理的傾向を背景としたプラグマティックな認定であるとしても、このような打ち切りが避けられない、他の一つの大きな必然的な理由があることも見逃すことはできない。しかも、そこに意志の自由の問題のきわめて重大な意味が含まれているように思える。それは内的因果が結局は外因に接続しているという一般的知識の枠組みを前提としても、実際にこの因果の連鎖をわれわれの知識がたどることは多くの場合不可能であるということである。因果の系列がいったん人間の内部に入り込んでしまうと、多くの場合事態は複雑すぎて現在のわれわれの知識では全く手におえないものとなり、結局どこかでこの系列を打ち切らざるを得ないことになる。そこでどうしても因果を完成しようとすれば、複雑すぎる部分をブラック・ボックスと考える、他の外的な因果系列と直結するという物理学の常道に従うか、あるいは、これを別な形の因果にすりかえる、つまり、^(注4) physical な因果記述から ^(注5) mental な因果記述へと移行するということになるわけである。かくして、

「意志」が原因として登場してくる。

(坂本百大「オートマトン、自由意志、不確定性」による)

(注) 1 初期条件——時刻ゼロにおける運動体の位置や初速度の値。

2 遷移確率——量子力学において、ある状態から他の状態へと移る確率。

3 フィード・バック——ここでは結果(アウトプット)によって原因(インプット)を調整すること。

4 physical——物理的、物的。

5 mental——心理的、心的。

問

(A) 〓〓 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 〓 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 〓 線部(1)について。左記各項のうち、その例に該当するものを1、該当しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 国破れて山河あり。

ロ 間食を控えたら体重は減るだろう。

ハ 日本の首相であるならばその人は日本人だろう。

ニ 腹八分目に医者いらす。

ホ 零度になったら水は凍るだろう。

(D) 〓 線部(2)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 先行する意志が、後に続く行動を自由に選択する。

2 最終的に外部原因をもつ行動は、自由なものとなす。

3 行動の一部を、内部原因によるものと認める。

4 制度や慣行の選択を、人間の自由な意志によるものとする。

5 行動の連鎖の一部に、因果的でないものを発見する。

(E) 線部(3)について。「因果の連鎖を人間内部で適当に打ち切る」の具体例として適当でないもの一つを、

左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 猛勉強したのは、第一志望の大学に進学したかったためだ。

2 疲れがとれないのは、安易に仕事を入れすぎたせいだ。

3 試合で好成績を残せたのは、コーチの指導に報いたかったからだ。

4 傘を持っていたのに濡れてしまったのは、突然の大雨のせいだ。

5 つい食べ過ぎてしまったのは、ご馳走を残しては悪いと思ったからだ。

(F) 「人間の意志は実際に自由に選択を行なっているのか」という本文冒頭の問いに対する筆者の主張として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 われわれの生活を支えている、行動の因果を適宜打ち切ろうとする傾向が、意志の自由の存在を指し示している。

2 物理学を軸とする因果決定論が絶対的に正しいわけではなく、その決定論が無効となると同時に、人間の意志の自由が浮かび上がる。

3 人の行動を決定する要因を、その人の内部に見定めることが実用に適うとき、その行動は自由な意志によって選択されたとみなされる。

4 行動の原因を意志に求めようとしても、その因果の完結の規準は時代とともに揺れ動く以上、意志の自由は保証されない。

5. 人の行動の内的原因は外的原因に接続しているのに、現在のわれわれにはその因果系列がたどれない以上、意志の自由は真の原因のすりかえでしかない。

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 科学的決定論の実質としての因果決定論には、古典力学的なもの量子力学的なものがある。

ロ 現在のわれわれの知識が、物理科学的な因果決定論の枠組みのもとに編成されているのは偶然ではない。

ハ 現実の世界では、全体として決定論の枠組みを前提としつつも、部分的にその枠組みをゆるめて「自由」を導入する実用的な選択に迫られる。

ニ われわれが自らの行動を「自由」と感ずるのは、自分の行動の因果を適宜打ち切りたがる自然な傾向をもつからである。

ホ 物理学のもとにある人間外部の因果系列は、人間の脳内過程の因果系列と比べて、多くの場合に複雑すぎる。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

すべては一瞬の出来事のようなだった。

医者が出て行くと、信太郎は壁に背をもたせ掛けた体の中から、或る重いものが脱け出して行くのを感じ、背後の壁と「自分」との間にあった体重が消え失せたような気がした。そのまま体がふわりと浮き上りそうで、しばらくは身動きできなかつた。

看護人が母の口をしめ、まぶたを閉ざしてやっているのに気がついたのは、なおしばらくたってからのことのようにだ。看護人の白い指の甲に黒い毛が生えているのがすこし不気味だったが、彼の手をはなれた母を眺めるうちに、ある感動がやってきた。さつきまで、あんなに変型していた彼女の顔に苦痛の色がまったくなく、眉のひらいた丸顔の、十年もむかしの顔にもどっているように想われる。……そのときだった、信太郎は、ひどく奇妙な物音が、さつきから部屋の中に聞えているのに気がついた。^{a)}肉感的な、それでいて不断きいたことのない音だ。それが伯母の嗚咽おえうの声だとわかつたとき、彼は一層おどろいた。人が死んだときには泣くものだという習慣的な事例を憶い出すのに、思いがけなく手間どつた。なぜだろう、常人も泣くということを彼は何となく忘れていた。その間も絶えず泣き声がかきこえてきて、その声はまた何故ともなく彼を脅かし、セキ立てられているような気がした。ついに彼は泣かれるということが不愉快になってきた。それといつしよに、泣き声をたてている伯母のことまでが腹立たしくなつた。あなたはなぜ、泣くのか、泣けばあなたは優しい心根の、あたたかい人間になることが出来るのか。一方、伯母のとなりでは父が立て膝をついて、大きな頭を両手にかかえこんでいた。すると、その瞬間から彼は何ともシラジらしい心持になつてきた。……泣いている老婆と頭をかかえこんだ老人のうしろを、看護人が殺気立つような気配で廊下を駆け出して行ったかとおもうと、大きな丸いニギリメシに箸を突き立てたものを、ひどく神妙b)な顔つきで運んできた。母の枕元に、それと水を入れた茶碗を置くと、廊下ごしに窓からこちらを覗いている患者たちを叱りとばしながら、また何処かへ駆け出して行く……。それを見ると、ふと、

この男は母の死ぬまえにやったことを苦にして、気まずい思いを避けるために、あんなに跳びまわるのかとおもった。もしそうなら、そんなことは気にしないでいい、と云ってやりたかったが、こちらの顔をほとんど見ないようにしているらしく、その機会はつかめそうもない。——もつとも、この男の方から追いつがるような眼つきで、こちらを見られたとしたら、それはそれで、苦しいペンカイでもきかされそう、こちらが逃げ出すかもしれないけれど……。

嗚咽の声に悩まされながら、そんなことを考えているうちに、信太郎はもうこれ以上、自分がこんなところに坐っている必要は何もないはずだ、と思つた。彼は即座に立ち上つた。部屋を出るとき、伯母が真赤な眼を上げて、 こちらを見たが、そのまま出てきた。

戸外の土を踏んだ瞬間、信太郎はふらふらとメマイの起りそうな気がした。頭の真上からイキナリキョウレツな日光が照りつけて、眼をつむると、こんどは足もとが揺らぐようにおもつた。やはり、かなり疲れているからにちがいない。それに、ここ一週間以上、八日か、九日の間に、一度日除けを買いに掛けたことをのけると、日中こんなふうには外へ出たことはまったくなかつたせいでもあるだろう。運動場へ出たのは、いつも夕暮れどきか、夜だった。

——九日間、そのあいだ一体、自分は何をしていたのだろう。あの甘酸っぱい臭いのする部屋に一体、何のもりで閉じこもっていたのだろう。たとい九日間でも、そのあいだ母親と同じ場所に住んでみることで、せめてもの償いにするつもりだったのだろうか？ 償いというにはあまりにお手軽だとしても、しかしそれなら一体、何のための償いなのだろう、何を償おうとしていたのだろうか？ そもそも母親のために償いをつけるという考えは馬鹿げたことではないか、息子はその母親の子供であるというだけですでに充分償っているのではないだろうか？ 母親はその息子を持つたことで償い、息子はその母親の子であることで償う。彼等の間で何が行われようと、どんなことを起そうと、彼等の間だけですべてのことは片が付いてしまう。外側のものからはとやかく云わ

れることは何もないではないか？

信太郎は、ぼんやりそんな考えにふけりながら運動場を、足の向く方へ歩いていった。——要するに、すべてのことは終ってしまった——という気持から、いまはこうやって誰にも遠慮も気兼ねもなく、病室の分厚い壁をくりぬいた窓から眺めた「風景」の中を自由に歩きまわれることが、たとえようもなく愉しかった。頭の真上から照りつける日射しも、⁽³⁾いまはもう苦痛ではなかった。着衣の一枚一枚、体のすみずみまで染みついた陰気な臭いを太陽の熱で焼きはらいたい。海の風で吹きとばしたい……。そのとき、^(c)いつか海辺を石垣ぞいに歩いていった信太郎は、眼の前にひろがる光景⁽⁴⁾にある衝撃をうけて足を止めた。

岬に抱かれ、ポツカリと童話風の島を浮べたその風景は、すでに見慣れたものだった。が、いま彼が足をとめたのは、波もない潮水よりもなだらかな海面に、幾百本ともしれぬ杣⁽⁵⁾が黒ぐると、見わたすかぎり眼の前いっぱい突き立っていたからだ。……一瞬、すべての風物は動きを止めた。頭上に照りかがやいていた日は黄色いまだらなシミを、あちこちになすりつけているだけだった。風は落ちて、潮の香りは消え失せ、あらゆるものが、いま海底から浮び上った異様な光景のまえに、一挙に干上って見えた。菌を立てた櫛⁽⁶⁾のような、墓碑のような、杣の列をながめながら彼は、たしかに一つの「死」が自分の手の中に捉えられたのをみた。

(安岡章太郎『海辺の光景』による)

問

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと)

(B) 線部(a)・(c)について。本文中での意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、それぞれ番号で答えよ。

(a) 肉感的な	1	猛々しい	(b) 神妙な	1	こわばった	(c) いつか	1	そのまま
	2	息苦しい		2	おごそかな		2	いつのまにか
	3	いきいきした	3	超然とした	3	しばらく	3	以前に
	4	濃密な	4	しおらしい	4		4	
	5	なまなましい	5	困惑した	5		5	あたかも

(C) 空欄 にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で

答えよ。

- 1 怪訝そうに 2 不愉快そうに 3 恨めしげに 4 憎々しげに 5 悩ましそうに

(D) 線部(1)について。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 母の死を前にしても息子である自分にはどうしても涙が出ないのに、伯母が大きな声を上げて泣きながらその死を悼んでいたから。

2 人が死んだときには誰でも泣くものだというのを伯母の泣き声を聞いて不意に思い出し、自分の薄情さを痛感せずにはいられなかったから。

3 母の死に直面し、その喪失の悲しみによって自分の中にうがたれた空虚のなかに、伯母の泣き声が容赦なく流れ込んでくるかのような感覚を覚えたから。

4 母の死に顔には苦しみがなく、母が元氣だった頃の顔を思い起こさせるのに、そばで伯母が声を上げて泣きながら母の死を悲しんでいたから。

5 母のまぶたを閉じる看護人の指に生えた黒い毛の不気味さが、伯母の場違いに思えるほどわざとらしい泣き声とあいまって不愉快だったから。

(E) ——— 線部(2)について。その理由として、左記各項のうち、ふさわしいものを1、ふさわしくないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 肉親とはいえ、母の死は特別に嘆き悲しむような出来事ではないから。

ロ 人の死に涙を流せるのは心の優しい人だと、伯母が信じているように思えたから。

ハ 父と伯母の背後でせわしなく動きまわる看護人が滑稽に感じられたから。

ニ 伯母の嗚咽に邪魔されて、母を失った悲しみにふける機会を逸してしまったから。

ホ 「妻の死を悲しむ夫」という役割を父が演じているように感じられたから。

(F) ——— 線部(3)について。このときの心情を説明したものとして最も適當なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 母に対してよい息子ではなかった自分を強い日射しで罰することに倒錯的な喜びを感じている。

2 母の看病の間、窓から眺めるしかなかった風景の中を自由に歩き回れる解放感に浸っている。

3 母の死を看取り、息子として最低限のやるべきことを果たしたという満足感を覚えている。

4 母への罪悪感が解消されて、これから思う存分自分の人生を生きるのだという希望に燃えている。

5 母の看病にともなう重たい疲労感を焼き払ってくれるかのような強い日射しを爽快に感じている。

(G) ——— 線部(4)について。その理由として最も適當なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 波も潮の香りも失った海辺の光景が、永遠の中に閉じ込められていると感じられたから。

2 まるで母の死を嘆くかのように、静まりかえった海から墓標のような代が現れていたから。

3 海面に浮かんだ黄色いまだらなシミが、病床にあったときの母の姿を思い起こさせたから。

4 死から解放されたと思っていた矢先、眼の前に死を思わせる光景が待ち構えていたから。

5 童話的なものとはかり思っていた風景が、実際には墓地のように陰惨なものだとわかったから。

三 左の文章は、『源氏物語』の一節で、自らの実父が桐壺帝（故院）ではなく、実は光源氏（大臣）であるという重大な秘密を知った冷泉帝（上）が煩悶する場面である。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解
答用紙に書くこと）

上は、夢のやうにいみじき事を聞かせたまひて、色々にし乱れさせたまふ。故院(注1)の御ためもうしろめたく、大臣の、かくただ人にて世に仕へたまふもあはれにかたじけなかりけること、かたがた思し悩みて、日たくるま(1)で出でさせたまはねば、かくなむと聞きたまひて、大臣も驚きて参りたまへるを御覧するにつけても、いとど忍(2)びがたく思しめされて、御涙のこぼれさせたまひぬるを、おほかた故宮(注2)の御ことをひる世なく思しめしたるころ(3)なればなめり、と見たてまつりたまふ。

その日式部卿(注3)の親王(4)亡せたまひぬるよし奏するに、いよいよ世の中の騒がしきことを嘆き思したり。かかるころなれば、大臣は里にもえまかでたまはで、つとさぶらひたまふ。しめやかなる御物語のついでに、(5)「世は尽きぬるにやあらむ。もの心細く例ならぬ心地なむするを、天(6)の下もかくのどかならぬに、よろづ(7) a なむ。故宮の思さむところによりてこそ世間のことも思ひ憚りつれ、今は心やすきさまにても過ぐさまほしくなむ」と語らひきこえたまふ。「いとあるまじき御事なり。世の静かならぬことは、かならず政(8)の直くゆがめるにもよりはべらず。さかしき世にしもなむ、よからぬ事どももはべりける。聖(9)の帝の世にも、横さまの乱れ出で来ること、唐土(10)にもはべりける。わが国にもさなむはべる。ましてことわりの齢(11)どもの、時いたりぬるを、思し嘆くべきことにもはべらず」など、すべて多くのことどもを聞こえたまふ。片はしまねぶも、いとかたはらいたしや。常よりも黒き御装(12)ひにやつしたまへる御容貌(13)、たがふところなし。上も年ごろ御鏡にも思し寄ることなれど、聞こしめししことの後は、またこまかに見たてまつりたまうつつ、ことにいとあはれに思しめさるれば、いかでこのことをかすめ聞こえばやと思せど、さすがにはしたなくも思しぬべきことなれば、若き御心地につつましくて、ふともえうち出できこえたまはぬほどは、ただおほかたのことどもを、常よりことに **b** 聞こえさせたまふ。

うちかしこまりたまへるさまにて、いと御氣色ことなるを、かしこき人の御目にはあやしと見たてまつりたまへど、いとかくさださだと聞こしめしたらむとは思さざりけり。

(注) 1 故院——今は亡き桐壺帝のこと。冷泉帝の父。

2 故宮——今は亡き藤壺のこと。冷泉帝の母。このときは、まだ亡くなってから日が浅い。

3 式部卿の親王——桐壺帝の弟。

問

(A)——線部(1)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 光源氏が出世をめざして真面目に仕えていらつしやるのも
- 2 光源氏が秘密を隠して平然と昇進を続けていらつしやるのも
- 3 光源氏が位の低い官人ながら世の評判になっていらつしやるのも
- 4 光源氏が臣下として朝廷にお仕えになっていらつしやるのも
- 5 光源氏が身分を偽って恋多き生活を送っていらつしやるのも

(B)——線部(2)の文法的な説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 「こぼれ」は動詞、「させ」は使役の助動詞、「たまひ」は補助動詞、「ぬる」は過去の助動詞
- 2 「こぼれ」は動詞、「させ」は尊敬の助動詞、「たまひ」は補助動詞、「ぬる」は完了の助動詞
- 3 「こぼれ」は動詞、「させ」は尊敬の助動詞、「たまひ」は補助動詞、「ぬ」は打ち消しの助動詞、「る」は尊敬の

助動詞

- 4 「こぼれさせ」は動詞、「たまひ」は補助動詞、「ぬる」は完了の助動詞

5 「こぼれさせ」は動詞、「たまひ」は補助動詞、「ぬ」は完了の助動詞、「る」は自発の助動詞

(C) 線部(3)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 光源氏が故宮との思い出は消えることはないと懐かしく回想していらつしやるころ

2 光源氏が故宮のことを決して忘れまいとお考えになっていらつしやるころ

3 冷泉帝が亡き母をしのんで涙せずにいられる世などないと考えていらつしやるころ

4 冷泉帝が母の死を涙の乾くひまもないほどに悲しく思っただけでいらつしやるころ

5 冷泉帝が亡き母を忘れられずに思い出してばかりいらつしやるころ

(D) 線部(イ)・(ロ)はそれぞれ誰の動作・行為か。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で答えよ。
ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

1 大臣(光源氏) 2 上(冷泉帝) 3 故宮(藤壺) 4 故院(桐壺帝) 5 筆者

(E) 線部(4)の現代語訳を十五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(F) 線部(5)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 世の平安 2 帝の治世 3 帝の寿命 4 光源氏の寿命 5 光源氏への信頼

(G) 空欄 a・b にはそれぞれどのような言葉を補ったらよいか。その組み合わせとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 a らうたく b あわたたしく 2 a らうたく b なつかしく

3 a なつかしく b あわたたしく 4 a あわたたしく b らうたく

5 a あわたたしく b なつかしく

(H) 線部(6)について。これは冷泉帝のどのような意志を表した言葉か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 親政を続けること 2 讓位すること 3 出家すること

